

応援します
元気な農業

「夏秋どりイチゴ」を初収穫

～冷涼な町の気候を生かした作目に期待～

「夏秋どりイチゴ」の収穫が、亀山秀長さん（60歳・星野）と小谷地喜代治さん（57歳・小田）のお宅で9月23日から始まっています。

イチゴ栽培は、葛巻町産業振興協議会（会長・中村哲雄町長）が夏に涼しい本町の気候を生かし、中山間地域の有望な作目の一つとして、平成13年度から農家の協力を得て実証試験を行っているものです。

試験当初は技術的なノウハウがなかったため、作型の確立や栽培技術の向上に苦慮しました。その後、独自に購入した短日処理ハウスの活用や東北農業研究センターなどの熱心な指導によって、今年初めて出荷までこぎ着けました。

本年度は、県の補助事業（トップブランド園芸産地ルネッサンス事業）で園芸資材などを整備するとともに、2人は町単独の補助事業でパイプハウスを各1棟（約130平方メートル）購入しました。

今年から始めた小谷地さんは、2年前から取り組んでいる亀山さんの親苗を元に、6月22日から約1カ月間の短日処理を行い、7月23日に513本の苗を定植しました。

「時間的にはあまりかからないけれど、ハウスの開閉や長く伸びたランナー（茎）、葉の処理など毎日の手入れが必要です。汚れず、軽いので女の人や高齢者にも向いていると思います。ハウスを増やして量産できれば出荷時の無駄も少なくなり、一定の収入が見込めるのではないのでしょうか」と手ごたえを感じています。

国内のイチゴ生産は、端境期の7月から10月までは少なくなり、輸入品に頼っている状況です。しかし、品質的な不満から洋菓子製造者などから端境期の国産イチゴの生産要望が高まっています。このため、夏秋どりイチゴは市場性、将来性とも有望で単価も高く、高収益が期待されます。

同協議会では、生産農家の拡大に取り組み、良質なイチゴの生産によって農家の所得向上を目指しています。

【問い合わせ先】農林課（☎役場内線144）



8割程度色づいたイチゴを収穫する小谷地喜代治さん

「もったいない」の
考えを大切に

IBCテレビが日ごろの葛巻町の取り組みを題材にし、CM（「マーシャル」「オラホのまちのもったいない宣言」）を制作しました。

平成十七年度日本放送連盟賞「統一キャンペーン部門」のテーマ「守ろう地球環境」に応募するためのもので、作品は見事に最優秀賞を受賞しました。

そのCMをすでにご覧になっている人も多いかと思いますが、「風、もったいないから電気に変えました」「木くず、もったいないから燃料にしました」に

ひ 町長の
とりごと 16



始まり、牛のふん…電気、廃校…自然エネルギー学校、廃校の教員住宅…カフエ、老人の知恵…子どもに伝えていきます。岩手県葛巻町のもったいない宣言！と、すべてに「もったいないから」の入った六十秒のCM。もちろん、町も第三セクターもお金はかけていません。

「もったいない」という考えを、日本人も世界中の人々も忘れてしまっています。だから今、こんなに地球が壊れてしまい、年中大災害が発生するようになってきたのです。わたしたちは「もったいない」の考えを大切に、地球を守り、地域経済も守っていききたいものです。